

視 察 調 査 報 告 書

委 員 会 名	福祉病院委員会
参 加 者	委 員 長 前田 麗子 副委員長 加藤 嘉哉 委 員 本多 勝 中根 善明 神谷 茂樹 福田 澄代 土谷 直樹 白井 正樹 加藤 義幸
視 察 日 時	令和 7 年 1 月 21 日（火） 10:00～11:30
視察先・概要	東京都三鷹市 人口：190,497人 世帯数：97,663世帯 面積：16.42 k m ²
視 察 項 目	「三鷹市福祉 Labo どんぐり山」について
視 察 概 要	1 福祉 Labo どんぐり山の経緯、背景 令和 2 年 3 月に廃止した「三鷹市立特別養護老人ホームどんぐり山」を利活用し、在宅生活を望む高齢者とその介護を担う家族、市内介護事業者等を支援する「在宅医療・介護の推進拠点」として施設を整備し、令和 5 年 12 月に開設した。 2 施設の特徴 在宅医療・介護研究センター、介護人材育成センター、生活リハビリセンターの 3 つのセンターで構成されている。 (1) 在宅医療・介護研究センター 実証フィールドの提供などによる企業や大学等が行う研究・開発の支援を行っている。福祉 Labo どんぐり山を拠点として活動を行う企業・団体等のための研究用・業務用のレンタルオフィスを 6 室用意している。その中で、e スポーツを活用した取組や、コミュニケーションロボットの実証、脳の海馬の育成に向けた運動習慣形成アプリの検証などを行っている。 (2) 介護人材育成センター 専門職・市民向けに、すぐに役に立つ調理実習、医療的ケアなど実践的な研修を行っている。 (3) 生活リハビリセンター 自宅に近い環境で生活できるショートステイ用の居室を用意。それぞれの入居者の自宅に合わせて居室をアレンジしながら、自宅での生活がスムーズにできるよう支援している。 3 課題、今後の展望 施設が坂の上にあるなど、交通の便の悪さを解消するため、送迎バスを用意した。生活リハビリセンターは定員 7 名であり、現在は開設してまだ 1 年ということもあり、空き待ちはないが、周知が進むと予約が取

	りづらくなることが想定されるため、その対応をどうするかを今から検討しなければならない。
所 感 ※視察しての感想 や岡崎市への提 言など	・三鷹市福祉 Labo どんぐり山は、高齢者の在宅支援と地域共生社会の実現を目的に設立され、研究・実践・市民参加の三位一体のアプローチを採用している。VRリハビリやeスポーツを活用した介護予防、喀たん吸引研修、市民向け認知症体験イベントを実施し、地域福祉コーディネーターの全市展開を進める。本市においても、介護人材の育成強化、住民主体の通いの場の創出、VRリハビリの活用、民間事業者との連携などおおいに参考となる取組であった。福祉施策の持続には市民・民間との協働、技術活用が不可欠である。本市に適した形で施策を展開し、住民の健康と福祉を支える体制を強化していきたい。 ・この施設は特別養護老人ホームを改修して2023年12月に作られた施設とのである。改修された施設のコンセプトは「高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる社会の実現」である。これには在宅生活を継続したいというニーズに応える地域づくりという声に応えた施設としたいという思いが込められている。ここは三つのセンター「在宅医療・介護研究センター」、「介護人材育成センター」及び「生活リハビリセンター」で構成されており、在宅医療・介護研究センターでは先進的な技術を持つ企業などの研究や開発の支援を行うことで在宅生活の継続、介護サービスの質の向上を図ることを目的としている。協働してもらえる企業のためにレンタルオフィスもあり、既に満室となっているのも企業と連携できている印象であった。生活リハビリセンターでは自宅に近い状況で生活できる環境があり、これから介護する人と介護される人の両方の実証フィールドとなっており、生活のどこに課題があるのか、それをどう解消できるのかが事前に理解できる環境となっている。在宅での介護に不安なく入っていけることで生活上のリスクを減らすことができおり、とても有効な活用方法だと感じた。今後の課題としてはこの施設を利用したいという人が増えた場合は運用を考える必要があるとのこと。この施設の今後に注目していきたいと思う。 ・廃止した「三鷹市立特別養護老人ホームどんぐり山の施設利活用」というシーズと、「拡大する在宅介護需要」というニーズの双方の課題を解決する手段として開設された施設である。企画検討され新設した施設ではなく、老人ホームの居抜きという特性から立地や部屋割りなどの制約があるが、知恵を絞って利活用している。老人ホームの用途で課題にならなかった高台という立地は、集客施設としては不都合な面はあるが、市内7か所のコミュニティセンターからバスで送迎することにより小旅行イベント的な外出支援としても活用されている。東京都補助金を投入し超高齢社会の課題を解決する実験ラボとして建物を活用し、介護人材不足という課題を福祉事業団が前向きに解決している。保育分野も含め、本市の事業団の事業運営にも活かしていきたい。

- ・ 研究、研修、短期入所リハビリが一体となった複合型施設でした。研修に関しては本市でも事業所に課せられる研修があるため、受講のしやすさという面でよい取組と思われる。また、初任者研修も、国籍を問わず受講しやすい環境が整っており、人手不足対策につながるとと思われる。研究に関しては、本市では介護ロボット導入の補助金があるがその効果の分析には至っていないと思われるため、今後の活用を考えるのであれば、体験できる対象者を拡大できる取組は魅力的だと思われる。問題点としては本市には財政面で余力がなく、同市のように都からの補助金がないことである。収支状況を見ても継続性を考えると施設型は不可能であるが、各分野において方法を変えれば本市でも可能ではないかと考える。
- ・ 三鷹市福祉 Labo どんぐり山は、高齢者やそのご家族を支える温かな施設として、とても印象に残った。「在宅医療・介護研究センター」「介護人材育成センター」「生活リハビリセンター」の三つの柱が連携し、地域全体で、高齢者が安心して暮らせる環境を築いている点が素晴らしいと感じた。特に、最新技術を活用した介護支援や、家族も一緒に学べる研修プログラムは、利用者や家族の不安を和らげる優しさを感じる。さらに、リハビリを通じて在宅復帰を支える取組や、高齢者の生きがいを大切にする姿勢に心を打たれた。本市においても、このような心温まる福祉の形を取り入れ、地域全体で高齢者を支える仕組みを進めていく必要性を改めて感じた。
- ・ 利用者様に e スポーツの体験、VRによるリハビリ体験といった新しい取組(研究)をされている。その成果は、利用者が楽しんで行っている姿があった面は評価できる結果だが、コストの面(企業の協力で成り立っている)は課題があるとのこと。また、利用者には e スポーツになじみがなく、e スポーツを知らないのが現状であり、苦労までいかないが、なじむまでに少し時間がかかったとのこと。本市独自での活動は難しい面もあると思うが、民間(藤田医科大学や、市内にある施設)と連携し、利用者へ新しいサービスの提供をトライできるのではと感じた。
- ・ 令和2年3月に廃止した三鷹市立特別養護老人ホームの施設を利活用し、令和5年12月にオープンした三鷹市福祉 Labo どんぐり山は、在宅生活を望む高齢者とその介護を担う家族等を支援する施設である。施設内に、「在宅医療・介護研究センター」、「介護人材育成センター」及び「生活リハビリセンター」の三つのセンターを有し、それぞれ支援活動を行っている。現地視察にて生活リハビリセンターの施設や入居者への取組について詳しく説明を受けた。居室が7室あり、自宅に近い環境で生活できる居室になっており、日常生活と同様の動きを想定し、あえて段差がつけてあり、移動が必要となる広さが確保してあり、養護老人ホーム等の施設とは異なる施設となっており、在宅生活を望む高齢者を支援する目的がはっきりとわかる施設である。この施設は令和4年～6年3年間、東京都の、子供・長寿・居場所区市町村包括補助事業(3C区

	市町村包括補助事業)にて1億円／年×3か年の合計3億円の補助金を受けたとのこと。超高齢社会となる今後、介護施設をはじめとした福祉事業には国・県の補助金は必須ではないかと考える。今回の視察先は、本市にはない施設ではあるが、その取組内容は非常に理にかなっており、今後本市においても検討する価値がある取組であると考えている。 ・この施設は、「在宅医療・介護研究センター」、「介護人材育成センター」及び「生活リハビリセンター」の三つの事業を行っている。生活リハビリセンターは、介護保険施設ではなく、三鷹市独自の施設として数日から1か月程度で在宅復帰が見込める方の受け入れをしている。もちろん在宅介護サービスとの連携もしており、センターでの生活状況を居宅ケアマネージャー等と共有し、退所後に必要な支援を提案して、スムーズにデイサービス等に移行が可能である。課税世帯でも1日2,650円で利用できるのは、大変身近に感じることが出来ると思う。介護保険施設でない分、三鷹市の持ち出しもかなりのものになるであろう。本市においても財政が許すのであれば、このような施設があるとより高度な介護事業の提供、人材確保につながるであろう。
委員長の総括	特別養護老人ホームの跡を利用し、「在宅医療・介護研究センター」、「介護人材育成センター」及び「生活リハビリセンター」を運営している施設を見学した。東京都の子供・長寿・居場所区市町村包括補助事業の補助金を活用し、1年につき1億円、3年で3億円の補助金を使いながら施設の改修、事業開始準備がなされたとのこと。介護保険制度、医療保険制度を利用しない形での事業であり、官民連携の取組、実際の生活に即した生活リハビリの実施、介護人材の研修教育がなされていた。 介護保険の理念は「尊厳の保持」と「自立支援」であるが、実際の介護現場では利用者にとって理想とする自立した生活が送れないという場面にも出会う。今回見学したどんぐり山においては、日本の在宅介護の理念に立ち返る意味でも、例えば病院で働くセラピストやワーカー、また若い世代の介護職員などに見ていただくなどしてもいいのではないかと感じた。どんぐり山の取組をそのまま本市へ導入するというのは難しいとは思いますが、在宅介護の理念を介護職が学ぶ場所として、またその考えを持ち帰り、事業所運営に役立てるという意味では、大変に有意義な取組をしている施設であると感じた。